国際化対応海外特別旅費報告書

桑　名　佳代子

1．学会名：25th Triennial Congress of the International Confederation of Midwives
2．演題名：
A Study on the Duration of Hospitalization of Mothers and Infants after Delivery：On the Basis of Assessment of Nursing Care by Interview before Discharge, Home Visits, and Telephone
3．開催地：マニラ（フィリピン）
4．開催期間：1999年５月22～27日
5．発表者：桑名佳代子、兼宗美幸、坂本めぐみ、渡部尚子
6．発表要旨：

従来、日本の多くの施設では、分娩後の在院日数は一律に７日前後であったが、近年やや短縮化の傾向にある。分娩後の在院日数を看護の診断から評価し、継続看護の方法を検討することを目的として、在院日数が４～５日であった52例の母子を継続的に観察した。看護アセスメント表（14カテゴリー166項目）を作成し、退院前日の面接、退院後７～10日の家庭訪問、分娩後１ヶ月の電話訪問により、３時点についての看護問題を抽出して分析した。

在院日数が適切であり、しかも継続看護の必要性の低い母子は８例（15.4％）であった。これらは、母子ともに健康であり、家庭でのサポート体制が整い、セルフケア行動が適切な母親であった。在院日数は適切だが、継続看護が必要な母子は23例（44.2％）で、セルフケア、児の養護、家族関係の調整などに援助が必要であった。在院日数が不適切であったのは21例（40.4％）で、母体回復、乳房の状態、セルフケア能力、育児技術などから、すべて短すぎると判断された。初産婦は経産婦に比較して、分娩後１ヶ月を通して乳頭トラブル、児の皮膚と児の清潔に関する問題が多く認められた。一方、経産婦は上子への対応と家族関係の問題が多かった。

継続看護のシステムが整っていない日本においては、正常分娩の在院日数は全国平均で６日程度であるのは、一律の設定としては妥当であると考えられた。しかし、分娩後の母子の身体的、心理・社会的状況は大きく異なることから、分娩後の退院計画は個別に行い、個々のニーズに応じた継続ケアが必要であることが確認された。

BOOK OF PROCEEDINGS　318－323

丸　山　良　子

1．学会名：ICN Centennial Celebrations
2．演題名：Effect of low protein nutriment on cigarette smoke-induced respiratory changes.
3．開催地：ロンドン（イギリス）
4．開催期間：1999. 6.27- 7. 1
5．発表者：丸山良子、高橋方子、吾妻知美、石原陽子、福田康一郎
6．発表要旨

本学会は３年に一度開催される看護職中心の学会である。今回は特に国際看護協会が発足して100年目の記念学会であり、世界各国から口演、ポスターを含めて多数の参加があった。

発表した演題は、肺気腫のモデルとして長期喫煙暴露を行ったマウスを用いた実験の結果である。長期喫煙は週５日間、一日６本のタバコを７ヶ月間暴露した。この間マウスは、総カロリーは同じで、蛋白成分のみを変えた低蛋白、高蛋白、対象群に分けて飼育し、この間経時的に無麻酔、無拘束で呼吸機能を測定した。

マウスの体重は対象群に比べ、低蛋白群で体重増加抑制が認められた。呼吸パターンについてみると、呼吸数に各群間の差は認められなかったものの、体重100ｇ当たりの一回換気量に低蛋白群は増加を認めた。これらの結果より低蛋白が長期喫煙のもたらす呼吸器への影響を増加させる可能性が示唆された。

長　澤　治　夫

第13回国際パーキンソン病学会およびサテライト・シンポジウムがカナダのバンクバーで開催され、７月21日～30日まで参加した。本学会は、２年毎に開催され、前回はイギリスのロンドンで開催された。この２年間にパーキンソン病の研究は飛躍的に進歩した。特記すべきことは、パーキンソン病のなかの家族性に発症する家族性パーキンソン病の遺伝子異常が順天堂大学の水野芳邦教授等の研究グループによって発見され、パーキンソン病の発症機序を解明する分子生物学的研究が飛躍的に進歩したことである。また、発症機序の解明に伴い、治療法の開発に関する研究報告も増加している。新薬の開発、遺伝子技術の導入、細胞移植、定位脳手術による局所破壊や電極による持続刺激など病気の進行具合に応じて治療法の選択肢が増え、それぞれの長期予後についての研究報告が多数みられた。

今回は、東北大学医学部との共同研究で２題の研究成果を発表した。

1）Differential Vulnerability of Dopamine Receptors in the Mouse Brain Treated with MPTP
2）Alteration of Neurotensin Receptors in MPTP-induced Parkinsonian Mice

共同研究者は東北大学医学部神経内科所属、Tanji Hiroaki, Araki Tsutomu, Itoyama Yasutoの各氏である。この研究は、パーキンソン病のモデルをマウスで作製し、摘出した脳の神経受容体の経時的変化を解析したものである。抄録は、Parkinsonism and Related Disorders 5：S34-35, 1999. に掲載されている。

真　覚　　健

1．学会名：22nd European Conference on Visual Perception
2．発表演題：Recognition of facial identity between a child and an adult face.
3．開催地：トリエステ（イタリア）
4．開催期間：1999年８月22日－26日
5．発表者：真覚　健
6．発表要旨：

顔による個人識別は、表情やポーズ、照明条件の変化などに対して比較的頑健であることが知られているが、顔の経年変化が顔の同定に及ぼす影響についてはこれまで十分な検討がなされてこなかった。本研究は、成長による顔の構造的変化が見られる幼児期の顔と成人期の顔とで同一人物であるという認知が成立するか評定法を用いて検討したものである。

刺激顔パタンを変えて３つの実験を行ったが、いずれの実験においても同一人物顔ペアに対する評定値と異なる人物顔ペアに対する評定値との間には有意な差が見られた。このことから顔の構造的変化があるにもかかわらず異年齢顔間で顔の同一性認知が成立していたといえる。

成人期顔に対する既知性は、異年齢顔間での同一性認知にポジティブな影響をもつことが実験２では示された。また、同年齢間の顔の同一性認知では判断手がかりとしての重要性が低いとされる鼻領域が、異年齢顔間での同一性認知では比較的重要な手がかりとされていることも示された。

顔の特異性の影響については、幼児期・成人期ともに特異顔とされたペアでの同一性判断成績が優れていることが実験３で示されたが、顔の特異性は幼児期・成人期で変化が大きく、今後の検討が必要であることが示唆された。

Perception, 28 (Supplement), p. 113, 1999

太　田　喜久子

1．Conference Name: 52nd Annual Scientific Meeting The Gerontological Society of America

The Gerontological Society of America (GSA) was founded in 1945 and is the oldest and largest national multidisciplinary scientific organization devoted to the advancement of gerontological research. Its membership includes some 6,000 researchers, educators, practitioners, and other professionals in the field of aging. The Society's principal missions are to promote research and education in aging, and to encourage the dissemination of research results to other scientists, decision makers, and practitioners. GSA members affiliate with one of the Society's four sections: Biological Sciences, Clinical Medicine, Behavioral and Social Sciences, or Social Research, Policy and Practice. GSA organizes a Annual Scientific meeting which attracts about 3,000 professionals for more than 350 peer-reviewed scientific sessions and nearly 100 technical and educational exhibits.

2．Place：San Francisco
3．Date：November 19-23, 1999
4．Title：The Effectiveness of Group Home Care for the Elderly
5．Name：Kikuko Ota
6．Summary：

The group home ("Takurojo" in Japanese) is as a place to support the elders and demented elders by enabling them to continue to live in their neighborhoods. In Japan, "Takurojo"s for the elderly were started from about 1985. The present number of these "Takurojo" s exceeds 600, and is growing still. The establishing body and administration style of these "Takurojo" s varies, but they share common characteristics of a small number of staff and the elderly with emphasis on a family-like atmosphere. There have been reports of appreciation from families who have seen their elderly family member

regain a stable condition in these "Takurojo"s. However, no studies have been made of the quality or effectiveness of the care provided.

The purpose of this study was to clarify the effectiveness of "Takurojo" care by comparing the current verbal activity of the elderly utilizing in these "Takurojo"s with that exhibited by them prior to admission in hospitals or health facilities for the elderly.

The subjects were 11 people from 4 "Takurojo"s in Miyagi Prefecture in the Tohoku Region of Japn. There were 3 males and 8 females with an average age of 81.5. They all had a history of being accepted in hospitals or health facilities for the elderly. The method of study was interviews for caregivers in the "Takurojo"s and participant observation at these "Takurojo"s.

The results were found that the positive change in the elderly appeared in various aspects such as mind, behavior, facial expression, conversation, interaction with others, and perception of being in the "Takurojo". i) Change in their minds came with their desire to work on something by themselves, showing their desires and self-assertion. ii) Violent and confused behavior was reduced. Diapers were not necessary and the elderly could use the toilet for excretion. The bedridden elders were slowly walking. iii) Vivid expressions began to appear with occasional smiles. iv) Some silent elders began to engage in conversation. Some even started to make jokes. v) Some that were not interested in forming relationships began to show interest in interpersonal relationships. Some started to look after others, trying to find a role for themselves. vi) Perception of being in the "Takurojo" appeared in the verbal expression of the elderly that in this place they were free. They could act as the master. The place, they felt, was like home.

These results indicate that "Takurojo" care can bring about change for the better in various areas and that "Takurojo" is a place where the strengths of the elderly can be brought out. More characteristics of "Takurojo" care are needed to explore, for example relationship with the staff, and things they feel accustomed to such as a cozy home-like atmosphere.

The Gerontologist, vol.39, special issue 1 , October 1999, p.520.

坂　上　明　子

1．参加大会：第25回国際助産婦連盟（International Confederation of Midwives：ICM）大会
2．視察研修機関：Dr. Jose Fabella Memorial Hospital および Phillippine General Hospital
3．大会開催・研修地：マニラ（フィリピン）
4．大会参加・研修期間：1999年5月22日～27日
5．大会の紹介

ICMは、1922年ベルギーで開催された国際助産学会で創設され、1999年現在64カ国79団体が加盟している。世界中の母親、乳児、家族へのケアの向上を目的とし、助産婦教育の向上、助産技術と科学的な知識を普及させるとともに、助産婦協会から自国政府への働きかけを支援し、また専門職として助産婦の役割の発展を推進している。

ICM大会は3年に1度開催され、発展途上国では今回のフィリピンでの開催が大会史上初めてであった。今大会は今までの大会に比べ参加人数が少なかったものの63カ国約1000人が参加し、日本からは約100人が参加した。「Midwifery and Safe Motherhood Beyond The Year 2 000（21世紀の助産と母性の安全）」をメインテーマとし、毎日基調講演の後、「女性の健康の推進」「乳幼児と子供の健康の増進」「母性の安全」「伝染病」「助産教育」「カウンセリング」の6つをテーマとした分科会、ワークショップ、一般演題の発表などが行われた。貧困や蔓延する感染症、女性の社会的地位の低さ、民族紛争など各国・地域が抱える様々な問題に応じた助産婦活動・教育のあり方などについての発表、討議が多く行われた。助産婦は妊娠・分娩だけでなく、広く女性のライフサイクル全般の健康を支援する専門職であることが再認識できた。

6．研修内容

マニラ市内の2病院の産科病棟、NICU、小児科病棟、婦人科病棟を視察した。

Dr. Jose Fabella Memorial Hospitalは政府の慈善病院で、入院・治療費は無料である。1日の分娩数が平均120件、そのうち帝王切開は約35件という日本では考えられない状況の中で、感染症による新生児死亡を減少させる目的で母乳育児を強く推進し、WHO／ユニセフの認定する“赤ちゃんにやさしい病院（BFH）”に認定されている。産科病棟では、分娩直後から完全母児同室制・早期母乳栄養を取り入れ、母親同志が互いに授乳を助け合い、育児について相談できるようにとベッドの配置をタンデム式とし、経産婦と初産婦はベットを隣合わせにするなどの工夫がされていた。NICUではカンガルーケアを取り入れ、搾乳はコップで与えるなど人工乳・哺乳瓶の廃止を徹底して行っていた。外来・病棟の至る所に授乳風景や母乳育児の利点がポスターとして張られており、分娩数の多さから経膣分娩では産褥24時間で退院となるため、分娩前からの母親・家族への啓蒙活動を重視して母乳育児を推進している様子がうかがえた。

Phillippine General Hospitalではハイリスク妊婦の管理や、分娩時のケアの質を重視したLDR、婦人科癌患者のためのファミリールームなどを中心に視察した。

塚　田　貴　子

1．参加学会：第31回WOCN（Wound, Ostomy and Continence Nurses Society）学会
2．学会開催地：ミネアポリス（アメリカ合衆国）
3．学会参加期間：1999年６月20日～24日
4．学会の紹介

WOCNはその名の通り、Wound（創傷）、Ostomy（ストーマ）、Continence（失禁制御）のケアという専門分野においては世界で最大の教育的なプログラムであり、年に１度アメリカ合衆国あるいはカナダで開催される。WOCNは創傷、ストーマ、失禁や皮膚のトラブルをかかえた人々のケアを専門とする医師・看護婦・ET（Enterostomal Therapist）などの専門家や、それらに関心のある医用工学者・企業など、さまざまなメンバーで成り立っている。メンバーはアメリカ国内だけでなく、広く世界中に及んでいる。

学会の目的は、

・創傷・ストーマ・失禁の問題をかかえた人々の管理に関する理論的な知識の進歩と臨床的な知識の進歩を関連づけること
・創傷・ストーマ・失禁のケアに関する研究フォーラムを通して、最新の情報を普及させること
・専門的かつ臨床的な実践にインパクトのあった今日的な問題を見極め、それらについて討論すること
・さまざまな医療・保健・福祉施設における多領域にわたる実践の可能性について言及すること
・参加者の実践や専門職としてのマーケティングの上での戦略を概説すること
・患者の利益をさらに増進するための多領域にわたるアプローチを活用する可能性を見極めること
・多くの人が医療・保健・福祉サービスを利用することを容易にするための技術的な進歩を探求すること

である。

5．今期のトピック

学会は、６月20日から24日までの５日間にわたって開催された。20日はプレカンファレンスセッションとして、初心者のWOCナースにも上級者のWOCナースにもその専門的役割を向上させるために必要とされる臨床的技術を示す、３つのセッションが行われた。１．治癒困難な創に対する治療の可能性、２．（WOCナースなどの）専門的な資格の有用性の患者へのマーケティングの仕方、３．パワーポイントを使ったスライドの発表の仕方 及び データベースの作り方である。

21日からは創傷・ストーマ・失禁の各部門別に分かれ、会員たちが自由に出入りできる中で、各専門家たちが講演・パネルディスカッションを行った。今回は、創傷の分野がWHS（Wound Healing Society；創傷治癒学会）とのジョイントセッションとなっていたため、そちらの学会からの参加者も多く、細胞の成長因子を使った最新の慢性的創傷の治療についてなどが明らかにされた。

昼休みと夕方には関連製品の展示会が開かれ、また、ポスターセッションでは自由に討論が行われた。日本からの10数名の参加者のうち２組が、ポスターセッションでの発表を行った。